新山協ニュース

発行者　平田大六　発行所　新潟県山岳協会

〒940　長岡市学校町1－12－23　室賀輝男方　TEL 0258－32－0428

三周忌

藤島玄先生　思い出の綴　②

奇しきご縁

山崎幸和

藤島先生一周忌の追悼登山が催される平成元年9月10日朝の杁差岳は、未明の大雨も止み雨雲も切れ始めた。どうせなら、と前日から杁差小屋に泊り込み、先生を偲んだ峡彩の倉島正吉さんと高橋庄一さん、吉田の早川英夫さんとで本隊到着を待っていた私は、反対側の鉾立峰から来る単独者を発見した。新潟鉄工の平田静一郎さんである。「杁差の寿像に……」と先生の奥様より遺骨をお預りしたとのことで、ザックから大切に取出された。折返し直ちに下山せねばならぬ平田さんの事情もあって、早速我々5名で寿像前に穴を掘り納骨の儀を執行なった。花束とローソク、線香を供え合掌すると、脳裏には改めて今は亡き先生との色々な想い出が走馬灯のごとく甦ってきた。

藤島先生との最初の出会いは、昭和35年弥彦山での高頭翁寿像移築祭で、次は2ケ月後の松明登山祭であった。当時19歳の私にとって先生は正に雲の上の人であって、勿論口など利いて貰えるはずもない。そんな先生に9月思い切って手紙を書いた。吉田のパーティーで11月上旬朝日連峰縦走を企て、その照会と指導を仰いだのである。間もなく懇切丁寧な注意事項が記された返事と共に、発刊間もない著書『飯豊・朝日連峰』の朋文堂マウンテンガイドブックが届き、面識もない若僧にこれ程まで、と大感激させられたが、返信料を添えなかった非礼を厳しく戒められた。

翌36年、弥彦の花井馨さんの紹介のおかげで、先生から初めて声をかけて頂いた。この時「朝日も良いが、先ず弥彦を知れ」であった。そんなことから弥彦山塊を主としたご指導を頂くようになり、次第にその輪が他方面に拡がっていった。恒例の松明登山や高頭祭では勿論のこと、槇有恒・日高信六郎・松方三郎の先生方はじめ、多くの著名登山家を弥彦山登山にお誘い頂いたこと、前夜我家に泊られ弥彦山塊縦走をご一緒したこと、特に三重国体県予選会や弥彦山からの展望図での親身など指導や激励には奮い立たされたものである。

更に、先生と中島治一郎氏の消息を探ね歩いたことも印象深い。氏は昭和8年駒ケ岳と中ノ岳間に天狗小屋を建設した登山家で、東京で浴場経営していたが終戦直後まで出身地の吉田町に疎開していて再上京後の消息が不明。先生が新版『越後の山旅』執筆中、大事なことを聞きたいので是非消息が知りたい、と連絡があり、縁者を八方手を尽してようやく尋ねあてたものの既に他界されており、先生の期待に添えられなかったこと。

又、三重国体強化合宿での飯豊連峰では、切歯尾根を下り石転ビ沢を登ってギルダ原に到着すると、先生ご一行が待機しておられ多大なご指導を頂いたことなど……。

黙禱中、次々と際限ない回想にふけりながら、ふと我にかえり眼を開けば、杁差の空は一段と明るくなり、納骨された先生の寿像は気のせいかまるで霊がのり移ったかのように生々と輝いて見えた。そして忘れられないあの激励の言葉までが私には聞えてきた。「とにかく根気よくやること。繰返し何度でも考えること。そして新しい方式を考えだすこと。それは君の業務でも同じことだよ。」と。

それにしても、晩年の先生が飯豊周辺の山々を歩くのに私と早川さんも縁あって仲間と毎年ご一緒し、最後の山にもお伴することができた（本会報第46号載）。その上、一周忌追悼登山でも杁差小屋で1泊したため平田さんに遭遇し、先生の寿像に納骨することができた。これらの奇遇には自分ながら驚くと共に、しみじみ先生とのご縁を感謝しながら、今、三周忌の追悼にふけっているのである。

足元に提灯がついている

桑原悌治

はかりしれぬ「玄さん」の業績の中に、越後県境の山々を俯瞰した「集成図」がある。飯豊、朝日をはじめとし妙高、白馬にいたる山塊の生き様を360度の視野で詳細にあらわし示した、山岳地図の原書である。

その価値は高く評価され、全国の岳人に利用され、その後の山岳地図発刊に多大な貢献をし、開発に伴なう地勢変化に対しては、地史的な証しとなり厳然と生き続けている。

さて、この集成図に「苗場、谷川、岩菅」が昭和40年に発行されている。この作成にあたり、数年前から玄さんのお手伝いをした思い出の一こまである。

紅葉がはじまった志賀高原から岩菅山、烏帽子岳、笠法師山、秋山郷にいたる現地調査であった。名湯、発哺温泉の元湯「天狗の湯」に泊った。湯主は日本山岳会員でご親切なおもてなしと説明をいただき、翌早朝、お天気もよく、高天ケ原を経て岩菅山、裏岩菅と快調に縦走、とはいえ当時登山道は藪こぎの連続で、登山者には全く会うことがなかった。

烏帽子を経て笠法師に至り、踏み跡はますます不明、地図とにらめっこ。やっと下り口をさがし出したが、すでに陽は西に沈み、林内は薄暗く、まことに心許無く、案内人としては失格者である。「地図は現実を抽象化した概念である……」などぶつぶつぼやいていたら、玄さん曰く、「君はなかなかいいこと言うが、その読み方＝読図力が問題なんだ。そしてより現実を正確に示した地図が必要、そのために出かけてきたんだ。」と、なぐさめというより、貴重な説教を喰ってしまった。

つるべ落しの秋の夕暮れ、チョビヒゲ玄さんの笑顔は私の不安を一掃してくれた。

下り坂は意外とはっきりしていたが、玄さんの電灯が故障で役立たず、急坂を下りはじめたとたんに、疲れで足も腰もばて気味、でっかい玄さんが道を踏みはずして、ゴロゴロと二曲り程、藪の中を転げ落ちてしまった。「大丈夫ですか、ケガは……」呼べども返事なし。しばらくして闇の中から「心配するな、足に提灯がついてるよ。」実はムコウズネ（向脛）をしたたか打って声が出なかったという。それにしても相変わらずの気丈さに、2人で笑いこけてしまった。ほうほうの体で切明に下り、和山温泉仁成館の戸をたたいたのは夜の10時をまわっていた。

いま、集成図を見るたびに、玄さんとの調査山行を懐しく思い出す。いまは亡き大先達玄さんは、極楽浄土の道をのんびりと歩いておられることでしょう。

合掌

山と書物⑥

「親山遊谷――わらじの仲間の山日記――」若林岩雄著

「親山遊谷」などと言うと「深山幽谷」を連想し、遂には「高山深谷」にまでその想いは及んでしまう。「高山深谷」は知る人ぞ知る明治43年に創刊された山岳写真集で、開拓期日本近代アルピニズムの色濃い、パイオニアの気概に満ちた写真集であった。

それから80年を経て山登りは「親山遊谷」となった。山に親しみ、山に遊ぶという訳である。しかしこの著者にとって山登りは、確かにもう肩肘をはったパイオニア・ワークではなく遊びになってはいるが、しかし純然たる山遊びになり切ってしまっているわけでもない。いわく「我々の年代の、私のようなB級山屋にとって、『初登』という言葉は重い。そして、蝶のようにヒラヒラ舞い上がらせる重力遮断装置を持っている。」と。

著者は1948年生まれで、先鋭的な沢登り集団「わらじの仲間」の代表を今年の4月までつとめた。谷川岳○○ルート初登攀や、ヒマラヤ8000メートル峰初登頂の時代の洗礼を受けて育ってきた著者は「初」という言葉に強くひかれるものを持っている。そしてその初もの指向の強力な精神が「わらじの仲間」を極めてユニークな、時代の中で可能なパイオニア・ワークを指向する山岳会に育ててきたのだと思う。

山行の幅は広く、しかも自由闊達な発想のもとで山登りを展開している。沢あり、氷壁あり、岩あり、山スキーありである。しかしそれでいて山登りの原点を忘れているわけではない。

本書は本物の山ヤのコップ酒を片手にした山談議と言ったところか。著者の軽い表現の中に山登りの奥義を聞きとることが出来る。そしてまたその遊びの精神も。

「沢には山の魅力が凝縮されている」という。そこには決められたルートはなく、滝、淵、ゴルジュと千変万化する渓谷を相手に、自分の手と足を総動員してルートを開き、頂きを目指す。沢登りは大自然の真只中での、肉体と精神の冒険であると言える。

また「普通の山登りは、登ることは苦行かも知れないが、

沢登りは、登ることそれ自体が一番面白いのである」とも言う。

登山道の整備された日本の山で、市販のガイドブックを片手に、コース・タイムの長短だけを競っている日本の今日の登山者は、登山の原点を忘れていると言ったら、あるいは言い過ぎだろうか。

とに角、面白い本である。一読をすすめる。

（悠峰山の会　田中純夫）

私の好きな山の花 ④

マツムシソウ

下條　荘一

松虫の鳴く頃に咲くからマツムシソウ、という説がある。が、平地の山野に咲くマツムシソウは初秋の花なのだろう。私達が山で見るマツムシソウは、タカネマツムシソウで、晩夏の飯豊稜線、特に杁差岳に多く咲いている。

夏の山も盆を過ぎると秋風が漂い始め、めっきり登山者の姿も少なくなる。草原に咲く花も少なくなり、盛夏に咲き競った花も地下茎に栄養を蓄え、まぢかに迫った冬、そして来年の準備に余念がないところなのだろう。そんな彩りを失った草原に淡紫色のマツムシソウだけが、やけに鮮やかで夏の最後を惜しむかのように咲いている。

なぜ盛夏に咲かず、夏も終わり頃になって花を付けるのか不思議に思っていたが、この花はよほどメダチタガリヤではあるまいか。盛夏の皆が咲く時期と同時に咲いていたのでは、よほど美しいか醜いかしないと目だたない。皆が咲き終わった頃、『それではそろそろ咲くか。』と咲き始める。他に花が無いので、いやおうにも目に付いてしまう。やはり花にも個性があるのか、メダチタガリヤの花がいてもおかしくない。

この花はお世辞にも可憐という言葉は似合わないと思う。盛りを過ぎても注目されていたい、色気タップリのオバチャマを連想させる。それが良い悪いでなく、そういう色々な花があってこそ面白味があるというものだ。

盆休みに杁差岳へ登ったことがある。鉾立峰から杁差岳への草原にマツムシソウがたくさん咲いていた。他に花はほとんど見られない。私はマツムシソウにメッキリもててしまい、悪い気はしなかった。

この花のかわいそうなのは、他の花より時期がずれて咲き、大変目だつのだが、あいにく見てくれる人が、その頃になるとメッキリ少なくなることである。

第11回自然保護研修会
妙高山麓で野鳥を探る

自然保護副委員長　桑原　悌治

自然の生態系破壊が地球的規模で危惧されるとき、去る6月9日～10日、初夏をむかえた妙高山麓を会場に研修会は開かれた。

今回のテーマは「野鳥と自然」であり、講師は野鳥の会新潟県支部長の山本明氏、妙高高原ビジターセンター岸本茂徳氏にお願いした。

内容は鳥の見分け方について、鳴き声、姿、生息環境と行動など、座学と現地で研修した。以下その要点と感想を記す。

○野鳥の声は森林のさけび

人間は野鳥のすばらしい鳴き声や美しい姿に、日常当り前のこととして、見すごし、聞きすごしがちである。

野鳥は自然の生態系で、それなりに棲み分け共生し、その役割と機能を大きく果し、人間社会にとって欠かせぬ一員となっている。

野鳥と親しみ、かかわりを深めるにつれ、その魅力に引きつけられてしまう。それは美しい声であり、その姿行動であろう。手にとって確かめることができないだけに、はかりかねる未知の謎を秘め、奥深いロマンを感じさせる。双眼鏡やカメラ担いだトリキチが生まれるというわけ。

しかし、異常な開発と自然破壊は、野鳥の生息環境を奪い、種の絶滅をも増している。

美しく舞い、鳴きかなでる野鳥は、荒れゆく森林を守ろうとする叫びにも聞こえる。

○カラオケよりもむつかしい

東の稜線が白みはじめ、笹ケ峰牧場の木立がもやの中にぼんやりと佇み静寂そのものである。キョロンキョロン……夜明けの第一声は「アカハラ」であった。

つぎつぎと目覚めた鳥が、朝のご挨拶である。じっと耳をすまし、森を見すえる、みんな寂として声なし。講師から次々と鳥名と解説がはじまる。懸命にノートをとる、双眼鏡をのぞくも、不慣れで視野に入らない。

妙高山にむけて山道を登る「こんなにいろいろの鳥がいたのか」、森林のもつ多様な音色に今更ながら驚き、何気なしに野山にひたっていたように思えてならなかった。

講師の復習が始まった、さっぱり答えられず、「カラオケならねー、鳥は勝手がちがう」と楽才はぼやく……。

終点黒沢の出合はひんやりと、水は清冽、朝食となる。ほっと一息、満ち足りた探鳥のひとときであった。

○繰り返しが探鳥のコツ

ビジターセンターで総括講評をうける。バードウォッチングのコツは四季折々、様々の場所でしんぼう強く、観察の耳と目、感を繰り返しきたえることだという。

この度の探鳥で確認した鳥は40数種であった。40種位確認できるようになれば、いっぱしの鳥キチであるといわれたが、さてクリアーできる人は……。

今回の研修は登山者として、自然保護の防人としての感覚感性を改めて見直す契機となったのではなかろうか。

末筆ながらどんぐり荘の池田御夫妻にはほんとにありがとうございました。

「参加者」上野寿一・室賀輝男・藤井信・井上完三・山崎健二・高木博朗・五十嵐篤雄・望月力・本間一人・七沢恭四郎・橋本正己・福田享・平井敏公・草間雄一・植木繁男・堀井浩・堀井賢太・大矢直樹・石田国夫・桑原悌治

第12回自然保護研修会案内

観測史上記録的な暑さの夏も終り秋風が快い季節となりました。皆様には紅葉をおいかけての山行計画も多くお忙しい時節かと存じます。

第12回自然保護研修会を左記内容にて実施いたしますので多数の皆様の出席をお願いいたします。また、今年は環境庁の指導員の更新の年で有りましたが、今後の指導員の有り方や指導報告書の提出方法等について、新潟県環境保全課の担当者よりご指導をいただくことになりましたので、極力出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時　平成2年10月27日(土)～28日(日)

会場　宿泊　講義、講演

北魚沼郡入広瀬村大白川新田　雪国会館

登山　観察　浅草岳

講師　新潟県環境保健部環境保全課　担当者

小島六郎氏（元日本山岳協会副会長）

後援　北魚沼郡入広瀬村　入広瀬村山岳会

装備　秋山日帰り程度、シュラフ持参

会費　3000円　会場費、朝食、昼食代（夕食及び懇親会用品は各自持参）

申込み　長岡市末広1丁目4－34　堀井浩

☎0258－32－1621

締切　10月20日　消印

研修内容と日程

〈第1日目〉

16時30分　受付

17時　講義　県環境保健部環境保全課

講演　小島六郎氏（越後の山　今、昔）

20時～22時　懇親会

〈第2日目〉6時　起床

6時30分　出発　浅草岳

15時　解散

※年会費受付中　年額2000円　左記までお願いします。

郵便振替

口座　新潟8－18355

加入者名　日本山岳協会新潟県自然保護指導員会

申込　ハガキに所属団体名、参加者氏名、住所、電話、年齢等を記入して左記宛に申し込み下さい。

新潟県山岳協会宛

〒940

長岡市学校町1－12－23

室賀輝男宛

問合わせ　奥只見山岳会事務局　湯之谷村役場

佐藤明美方

☎02579－2－1122

その他　懇親会の飲食物は、各自地元特産品を持参下さい。

荒沢岳親睦登山案内

主催　新潟県山岳協会

主管　奥只見山岳会

日時　平成2年10月13日（土）～14日（日）

山名　荒沢岳（1968・7m）越後三山只見国定公園

宿舎　北魚沼郡湯之谷村銀山平村杉　奥只見山岳会山小屋（15名収容）

小屋が小さいので各自、車又はテント泊の用意もお願いします。伝之助小屋手前のカマボコ型小屋です。

装備　日帰り秋山装備（雨具、水筒、朝・昼食他）

シュラフ、テント、懐中電灯（ザイルは不要）

会費　800円（通信費、協会負担金他）

親睦用品は含みません。

日程　13日（土）19時受付、親睦会、22時就寝

14日（日）6時30分出発～前山～前嵓～山頂10時50分着、13時下山開始、17時解散予定

登山用品専門店
―― 信頼できるパートナー ――
大新スポーツ
新潟市東堀6 ☎(025)222-3736